

Faculty Development (FD) を考える：

東洋史学における FD のこころみ

川又正智 奥山憲夫 津田資久 太田麻衣子

東洋史学専攻生の東洋史イメージについて

川 又 正 智

I

大学は制度として分野によって学部学科専攻専修等に分かれて「何何学」の名称を冠している。大学入学後学部学科専攻の内容が入学前おもいえがいていたイメージと同じであるかどうかは、学生の修学意欲におおに関係がある。特に、入学後知識が増えてからの二年次三年次での専攻分属でなく、入試時から専攻単位のようにせまく分かれるような場合はこの影響がおおきい。

近年各大学とも学部学科専攻名称あるいは個々の科目名称を変更することが流行している。そのなかで、本学東洋史学専攻は名称を変更していない。受験者・入学者は「東洋史」にどんなイメージを持っているのであろうか。

「東洋史」・「東洋史学」は明治以来の用語であるが、学校科目名称としては現在の高校・中学には無い（旧制の学校にはあった）し、「世界史」の中にも出てこない。「東洋」は現代日本語としては「西洋」と対である。こまかい議論はあるものの、おおまかには西洋はヨーロッパ（あるいはヨーロッパとアメリカ、またアフリカも）のことで、東洋はアジアのことである、とは一般共通の理解であろう。「アジア史」も近年よく使用される。ほぼ東洋史と同義である。また、東洋と中国は同義ではないが、日本からすれば中国の影響がおおきいので、普通東洋といえ、日本と中国・朝鮮といった東アジアについてのことがおおい。東洋史学の中心も中国であるとおもわれている。

東洋史学のルーツの一つは漢学であるが、明治以来ずっと漢学の衰退が言われ、特に戦後はそうになってきた。その状況をめぐって、筆者の学生時代（昭和40年代のこと）中国学の先生のあいだで議論があった。文学・経学専門家である某先生は、日本の中国学が滅亡の危機にあると感じてさまざまな努力をし、われわれ学生にもその危機感はひびいた。いっぽう歴史学の某先生は、歴史なかでも東洋史はおもしろいから滅ぶことはない、との自信をしめした。その後、大陸政権との所謂日中国交回復後の中国語ブーム、次いでシルクロードブーム、「三国志（演

義)」ブームによって中国学関係の志望者は増加し、前述の文学某先生の危機感
は杞憂にすぎなかったかのようにみえた。経済成長とともに文学部へ進学するこ
ともわりと許容されるようになったということもある（ある世代以上の人のなか
には、文学部や理学部へ進学したいと言って親に苦い顔をされたり、反対されたり
した人が少なくないが、それだけに当時は興味のある人のみが入学していた）。
ところが、だんだん日中友好ムードは下火になり、「封神演義」や「キングダム」
は話題になったものの「三国志」ブームを継ぐほどにはならなかった。また、「理
科離れ」がマスコミで報道されるとともに、文学部関係者のあいだでは「歴史離
れ」「文学離れ」も話題になっていて、「理科離れ」と同じところからの現象のよう
である。諸大学とも東洋史学専攻志望者が減っているのは進学年代の人口減少だ
けが原因ではない。^{注1}

II

そのなかで、本学東洋史学専攻に入学した学生の持っている「東洋史」イメ
ージはどんなものか。平成23年度と24年度の一年次生に入学後10ヶ月たったこ
ろ「東洋史基礎論」という授業で、入学前と後で「東洋史」のイメージが変化し
たかどうか、作文を書いてもらった（一部二年次生をふくむ）。内容のこまかい
指示はせずおおまかな題だけで、短時間で書いてもらった。人数はあわせて約
80名で、文章は100字前後から長いもので400字くらい。200字程度のものが
おおい。以下にその内容を整理し、一部分サンプルをしめすことにする。

○まず東洋史の対象としての地理的範囲についてであるが、アジア全部（や西方）
をひろく勉強すると思っていたが授業は中国だけである、との回答が約2割ある。

- 01 アジアを中心とした幅広い歴史について勉強するのかなと思っていました。…
…現在の東洋史のイメージは中国を中心としたものというものです。
- 02 東洋史という名前なのにほとんど中国の事しか学べないのはやっぱり疑問
を感じる。
- 03 中東の事についての学問ではないかと思っていました。
- 04 入学前はイラン系のイメージが強かったが現在は中国に関するイメージに
変わった。
- 05 日本史からイスラム史のアジア全体の歴史を学ぶと思いましたが、実際に学
んでいる東洋史は中国を中心とした東アジアの歴史を学んでいます。……中国
史の重要性がわかったような気がします。
- 06 アジア全体のことを学習するのかな、と考えていたが実際はほとんど中国史
のみだった。

07 入学前、西洋史は少しは知っていたのだけれども、東洋史については全く知らず、どこら辺からが東洋史なのかさえ分からなかった。……（その後）主に日本、中国、朝鮮なのかなと思いました。

総合教育科目は別として、専攻専門科目としては、「西洋史概説」や・モンゴル史・朝鮮史などに関する科目は二次以上配当科目なので、一年次生はまだ受講していない。イスラーム思想やインド思想の科目は一年次生も履修できるものの、歴史とは銘うっていない。科目表では見えていても、中国史以外にかかわる授業にまだ直接接していないことが反映しているのであろう（中国史以外に関する科目が少ないことは確かであるし、演習科目は中国各時代と朝鮮・モンゴルだけである）。

なお、本専攻では、入学案内冊子やホームページで、アジア全体またユーラシア史・世界史についてひろく学ぶが、カリキュラム中心は中国史であることを広報している。03・04 から考えると、見えていない受験生もあるようである。

これまで新生に入学直後尋ねたところでは、大多数の学生が中国に興味をもって入学する。中国に次ぐのはモンゴル・中央アジア・シルクロードである。次いで朝鮮・西アジアで、南アジア・東南アジアはほとんど聞かない。

○前項とは逆に、対象範囲として中国のことを勉強すると思っていたがそうでなく広い、との回答が約1割ある。

11 中国だけの歴史なのかと考えていたが、東洋史とはモンゴルやインドなど様々な国に関連しているとわかった。

12 中国の歴史に集中して学んでいくものだと思っていたが、その考えは現在では少し違うものへと変わった感じを今は思える。……中国が軸となって周辺の国々や世界の様子が変わることによって中国がどのような歴史を歩んできたかを学ぶことができる。

13 中国史以外も周辺の異民族の歴史やヨーロッパ諸国とのつながりなど想像していた以上に東洋史は壮大でした。

14 日本等も含めた歴史を東洋史だと思っていた。

○だいたい全員が、東洋史全体として、入学前よりおもしろくなった、興味がふかくなった、奥深い、楽しい、やりがいがある、等と良いイメージに変わったとしている。

21 以前の自分の中国の歴史のイメージは、ゲームの三国志のイメージが強く、派手な戦い、強くたくましい武将が頭の中にあった。……かっこよく派手な戦

いをすると言っても過言ではなかった。しかし、実際学んでみて、宦官や外戚の存在の大きさを知った。自分のいっていた華々しい戦いではなく、陰湿な政治闘争が多く、少しがっかりしたが、逆におもしろかった。

22 日本史と東洋史は全く別物という見方を入学前はしていましたが、互いに密接な関係であることを大学の授業を通じて感じました。……シルクロードといった地域も東洋史の範囲に入ることのおどろき、また遺跡や遺物から様々な発見ができることについて歴史学の面白さを感じました。^{注2}

23 日本史や世界史を考える上でなくてはならないものだと思いました。

24 アジアのみならず他の地域の歴史についても知ることが重要であると感じた。

25 思っていた以上に複雑で幅広いものであることがわかりました。

26 最初は、もっと固苦しくてむずかしいことばかりやるのかと不安でいっぱいでした。……（が、そうでもなくて）最初は三国志をやりたいと言っていた自分がなつかしくてたまりません。

27 今も分かっていないことが多かったり、人によって違う考えがあり、何通りも説があったりと考えれば考えるほど深いものだと思ってきました。

28 思った以上に深く細かく様々な知識を知ることができました。

29 知識が増えるたびに東洋史のイメージが難しくて嫌から楽しいに変わっていきました。

30 固苦しくとても難しいというイメージから、学んで楽しいものというイメージになりました。

これに対して、つまらない、興味がなくなった、等の意見は無い。この調査時が入学後10ヶ月であるし、冬の朝第1時限の授業でもあったから、興味の続いている学生しかこの時に出席していないのであろう。したがって、マイナスイメージのまま、あるいはマイナスイメージにに変化した方については不明である。興味の有無は学力の高低より問題である。このアンケート回答学生のなかで、のちに退学した者は2名である。

また、アジアや中国の歴史を対象としているとみな考えているので、その点、入学後まったく見当ちがいの内容であったとの回答はないが、もともと西洋史・西アジア史をしたかったとの学生が各1名いる。

○入学前の東洋のイメージとして、固苦しい、古くさい、古い文明、遅れている、閉鎖的、漢字ばかりで難しそう、などのマイナスイメージをあげたものが少数ある。ヨーロッパ中心史観を正さねば、と言われて久しいがなかなか改まらない。

- 31 東洋史とは、古臭いホコリをかぶった物であり、西洋の歴史に比べれば、ゴミ同然だと思っていました。
- 32 世界の一体化を進めた西洋の歴史にくらべて、どこか閉鎖的で異質なイメージが東洋史にはあった。……（入学後）むしろ東洋こそが世界の一体化を進める役割を果たし、文化や道德の面で決して西洋に勝るとも劣らないという認識を持つことができた。

○その他として、中国史中心であるので、史料を読むために漢文の授業に本専攻は力を入れているのであるが、漢文が読めるようになるだろうかという不安や、受講して読めるようになって楽しい、との回答がある。また、高校での漢文は国語のなかであったが、ここでは歴史のほうで勉強するので新たな歴史学の楽しさを知った、との回答もある。

高校で必修であるはずの世界史未履修が問題になってからだいぶ経ったが、高校で世界史を履修していない学生は今もいるようである。

この調査のなかではないが、第二志望合格者の中に、何をする所か調べずに願書を出した、という例もあった。何をする所か合格してから調べた由である。

Ⅲ

先にしるしたように、Ⅱではこのとき欠席した学生（それは多分東洋史に興味のうすれた学生なのであるが）の考えは反映していないのであるものの、ここからカリキュラム改良点を考えてみる（授業のこまかい内容や方法について尋ねたものではないので、それは現れない）。高校で東洋史の語はつかわれていないにかかわらず、だいたい高校世界史のアジア部分とは思って入学しているので、その点は十分である。

ずっと主張されてきたように、世界史における西洋中心理念を排するとともに、東洋史における中国中心理念を排さねばならない。学科として日本史と東洋史専攻のみであっても世界史をめざすため授業としては他の地域も学習できるようにしておかなければならないし、文献史学専攻でも考古学や民俗学の授業も設置しなければならない。歴史は人間の行為の総合結果であるから、その理解は総合的な知によらねばならない。しかし、無限に資料や教員を揃え授業を増やすことはできないので、現実には各大学分業して特色とすることになる。狭くなることをおぎなうために、他学部聴講や他大学との単位互換もうまく運用できるようになれば展望がひらける。たとえば、先に漢文のことに触れたが、もし西方の研究を本式にするなら多くの言語の授業が必要である。専攻数の多い古い文学部には言語学や宗教学・各種外国文学の専攻がおかれていて哲・史・文いっしょに多くの言語の授業を展開している。本学でこのようにもっていくことは困難であろう。

とりあえず、本専攻では、中国史を主にしつつも、中国以外のアジア関係の科目を増やし（現在、ユーラシア史を冠した科目を増設したが、西洋史と名のつく科目は一科目しかなく、アメリカ史やアフリカ史は無い）、さらにそれを一年次からも配当することが必要である。新入時から西方の科目に接すれば、西方に興味を持って入学した学生にとっては意欲を失わずにすみ、中国に興味をもってきた学生にとっても、よりアジアのおもしろさを感じることができよう。

最近教養がまた求められている。教養とは知の高度な統合で（大学世界でいう教養科目や教養課程の教養は本来はともかく現場では別の意味になっている）あろうが、その点、歴史・歴史学こそ教養であるといえよう。また、現在アジアが激動している。宗教・民族・国境紛争は止まず、カリフも出現した。これを知るには歴史からである。

注1 昨今の東洋史学の状況について、大阪大学大学院桃木至朗教授の次の文も参照されたい。「逆風のなかの東洋史学」（2009『史学雑誌』118-1, pp. 34-36）

注2 考古学が歴史学研究の一方法であることはあまり知られていない（サンプル22）。高校教科書には遺跡・遺物のきれいな写真がたくさん載っているが、歴史学としての考古学的方法についてはふれないので、単なる挿図といわれるとおりである。

力をつける授業をめざして

奥 山 憲 夫

受験人口の減少に伴って、授業の状況も変化し、また中途退学者が増えていることは、どこの大学も直面している問題で、授業の改善は喫緊の課題である。授業を分りやすく工夫することが必要だが、同時にレベルを落さずという点が肝要であり、如何にして学士力をつけたうえで、卒業に導くかが問題である。

つい一方的な言い放しになりがちな授業を改善するには、教員と学生だけでなく、学生同士も互いに切磋琢磨するための仕組みや雰囲気作りも必要で、学生を巻き込む仕組みを増すことが大事だと思う。以下は、自分なりのそのような試みの報告である。

科目は二年次生を対象とする半期二単位の東洋史史料講読である。この科目は、三年次の演習1に備えるプレ・ゼミとしての狙いと、一年次の研究法Iをうけて漢文読解力の向上をめざす二重の目的をもったものである。今年のテキストには『明史』の成祖本紀を選んだ。正史は文章が素直で読みやすいことと、明の永楽

帝や靖難の役のことは知っている学生が多く、興味を持ちやすいだろうと思ったからである。漢文の読解も一種の語学だから、事前の予習と事後の復習が是非必要で、週に一度、教員が読んで解説するのを聞いているだけでは効果は挙らない。漢文の史料が読めなくては卒論が作製できず、従って卒業もできない。自分なりに、現状に強い危機感をもち、何とか学生を巻き込むかたちで、予習せざるを得ないような工夫が必要と考えた。試行錯誤しつつ、ここ数年、次のような方法をとっている。授業の終了時に、担当者二人を指名し、次週の授業が始まる前に、一限分のテキストの文章(大体、黒板が一杯になる程度)を板書しておいてもらう。授業が始まると、最初に教員の方で返り点・送り仮名を付し、各自の手元のテキストにそれを転写させる。そのうえで学生を指名して、短い一句ごと割り当てて、大きな声で音読してもらう。原則として、一限の授業の間に全員に当てるようにしている。何の語学でも同様だが、文法の授業は無味乾燥になりやすく、学んだことが実際の文章の中で、どのくらいの頻度で使われるのかも分らない。特に漢字の場合、文中のどこにあるかによって、同じ字が名詞にもなり、動詞・形容詞・副詞にもなるから、学生はとまどってしまうことが多い。まず音読することが慣れる為の第一歩と思うからである。勿論、分らない場合は、その場で辞書をひかせることはいうまでもない。学生に繰り返し言うのは、言葉だから難しいものではなく、必ず誰でも読めるようになる、ただ慣れるだけの時間をかける必要があるということである。全員に当てて、一人ずつ音読させれば、予習してきた者とそうでない者の差は一目瞭然である。読めた学生は皆の前で誉め、読めない者は注意する。ただ、最近はナイーブな学生が多いので、ハラスメントととられないように、務めて明るく、ユーモアを交えて注意するよう気を付けている。

当初、このようなやり方をすると、予習してこない学生、読めない学生が欠席してしまうのではないかと危惧したが、実際やってみるとそうではなかった。欠席する者は殆どなく、予習してくる学生が明らかに増えた。当初、教員の方で、板書の文に返り点・送り仮名を付してから読ませたが、次の段階では返り点だけとし、最終的には返り点も送り仮名も付さないで読ませるようにしたが、多くの学生が何とか読めるようになった。途中の小テストでは平均五〇点程度だったが、定期試験では七〇点余りになった。ある程度、効果が有ったのではないかと思っている。

唯だ、このようなやり方は、受講者が三〇人程度の科目だから可能なので、五〇人・一〇〇人の受講者がある授業ではできない。大人数の授業はどうしても一方的な言いっ放しになってしまいがちで、今後、どのように改善すべきか課題である。結局、全科目に共通する方法はなく、一科目ごとに効果的な改善を試みるしかないと思っている。例えば、三・四年次生むけの東洋史特殊講義は、本来、一・二年次に基本的な知識を身に付けたうえで、より専門的な内容を学ぶべき科

目だが、実際には、初歩的な概説から始めざるを得ず、結局、やや詳しい概説のような内容で終わってしまうことも間々ある。又、読書量が少ない所為か、国語力が不足している学生がみうけられるように思う。国語は全ての基礎で、国語力が弱くては、どの分野の学問も無理である。国語力の涵養は一朝一夕には困難だが、現状をふまえたうえで、如何に学生のやる気を引き出し、卒論を完成させ、学士としての力をつけて卒業させるか、今後、更に授業の改善・工夫にとり組みたいと思っている。その前提として、教員自身の学力向上・充実に努めることが第一義であることはいうまでもない。

「東洋史学基礎論」の授業改善への取り組み

津 田 資 久

はじめに

今回取り上げる東洋史学専攻の「東洋史学基礎論」（通年、4単位）は、従来の専攻教育では手の回らなかった部分を扱う、一年次学生の基礎研究力を養成・補完する科目として2008年に開講された授業である。当初は専任教員5名のオムニバス授業として実施されていたが、各教員の授業運営に対する認識や取り上げるテーマに一貫性がないことが、学生・教員の間で夙に指摘され、カリキュラム上の課題となっていた。かかる授業のあり方を改善する試みとして、2010年からの専任教員2名による春期・秋期の分割担当を経て、2011年からは専任教員1名による担当となり、一年間のより緊密なカリキュラムを学生に提供出来るようになった。

しかしながら、何が「基礎」であり、何を意識的・重点的に教育するかについては、担当教員に委ねられる部分が大きく、必ずしも当初目指した積極的な基礎研究力の養成に繋がっていない状況もあり、2012年度から専攻主任（当時）の石橋崇雄教授を中心として当初目的の再確認と議論がなされ、抜本的な見直しが行われた。その結果、2013年度からの改善点は、主として以下の三点に集約された。

- ① 教員自身が専門的に楽しい授業ではなく、飽くまで学生自身の学力向上と平易な説明を旨とする、内容・指導共に一貫性のある授業を目指す。
- ② 主に学生自身に作業させることを通じて、理解の定着を図る。
- ③ 以上を実現させるために、授業そのものはもちろん、定期試験以外に、半期ごとに複数回の小テストの作成・実施・添削など、教員による手間をかけた指導を行う。

これらを踏まえて、2013年度から筆者が担当することとなった。

かかる方針の下に具体的にどのようにシラバスを作成し、教育を行ったかについて、以下、報告することとする。

I シラバスと授業目的

まず 2013 年度のシラバスの概要を確認すると、次の通りである。

◎授業のねらい・到達目標

①到達目標

「東洋史研究法Ⅰ」、「東洋史概説Ⅰ～Ⅳ」と表裏・補完する、東洋史学の基礎的教養の習得を目的とします。

②授業のねらい

東洋史を研究するために不可欠な漢学（中国学）や歴史学の素養を培うとともに、文章作成に必要なスキルの向上を目指します⁽¹⁾。

◎評価

春期試験 35%、秋期試験 35%、小テストあるいはレポート 30%、（ただし文学部規定に基づき、授業回数の3分の1以上の正当な理由なき欠席をした場合には規定により「不可」とし、試験への出席を認めません。）⁽²⁾

◎具体的な評価方法

これらの評価基準により、総合的に評価する。

◎授業計画

○春期

第 1 回 ガイダンス

第 2 ～ 3 回 文章作成上のルール

第 4 ～ 5 回 『角川新字源』・『大漢和辞典』の使い方

第 6 ～ 7 回 「中国語辞典」の使い方

第 8 ～ 9 回 『二十史朔閏表』の使い方

第 10 ～ 11 回 「反切法」とは何か

第 12 ～ 13 回 「正史」と漢籍

第 14 ～ 15 回 専門的文献の探し方

○秋期

第 16 ～ 21 回 明治の文語文（漢文書き下し文）の世界・那珂通世『支那通史』を読む

第 22 ～ 29 回 中国の文語文（漢文書き下し文）の世界・『十八史略』と漢文の文法

第 30 回 まとめ

以上のように、春期では卒論作成に不可欠な原稿用紙の使い方に始まる文章作成上の注意点、辞書類などの工具書の使い方、漢字を使った漢字音の表記法、漢文史料の概括的紹介、図書の検索・入手方法などを扱い、秋期では辞書を引きながら漢文訓読と表裏とも言える書き下し文（文語文）の読解を中心に組んでいる。また授業展開に当っては、単元の内容を十分に習得するため、各人の状況に応じた復習・予習が不可欠であることは、何度も指導した。その上で、春期では単元の1回目に概括的な説明を行い、2回目にこちらが用意した設問を出席者全員に割り振り、作業を通じて解答させ、最後に次の単元の最初にレポートの提出ないし小テストを実施した。その採点・返却・模範解答の提示により、理解度・習熟度を学生自身で確認出来るように努めた。また秋期では配布プリントの書き下し文を1行分ずつ出席者全員に割り振り、書き下し文を読み上げ、口語訳させることにより、漢文訓読に至る素地を固めさせた。それと共に、板書により書き下し文を漢文の原文に復文し、説明・確認することで、習熟度に応じた理解力を深めることを目指した。

しかしながら、春期はほぼシラバス通りに授業展開出来たものの、秋期は割り振りを行ったにも拘わらず、予習を行わない者、自らの課題としての自覚に乏しく意味の通らない口語訳をしてくる者が毎週一定数おり、加えて想像以上に復文とそれに関する「東洋史研究法Ⅰ」を補完する文法及び歴史事実の確認で、大幅に時間を超過してしまった。そのため、予定した内容上のエッセンスは形を変えて随時消化したもの、結局、第22～29回に関する内容には入れなかった。また専門性が高まったことと予習・復習をしっかりとやらないと点数が取りにくくなったことと関連して、春期に比べて秋期の成績が概して低調だった。これらについては、今後の課題として一層の見直しが必要であると痛感させられた。

Ⅱ 授業アンケートから見る効果と課題

ここでは、既述の指導がどのように受講者に受け止められたかを、特に授業での指導と密接な相関関係にある2013年度授業アンケート（春期・秋期）設問のQ2～Q5を取り上げて、検討することとする。

Q2. 意欲をもってこの授業に参加した。

・春期平均 3.68（5：8名、4：17名、3：13名、2：1名、1：2名）※全学 3.86

・秋期平均 3.77（5：8名、4：15名、3：15名、2：1名、1：0名）※全学 3.95

Q3. この授業について十分に理解できた。

・春期平均 3.56（5：5名、4：18名、3：15名、2：1名、1：2名）※全学 3.71

・秋期平均 3.72（5：6名、4：17名、3：15名、2：1名、1：0名）※全学 3.84

Q4. この授業を受講して満足している。

- ・ 春期平均 3.71 (5 : 7 名、4 : 19 名、3 : 13 名、2 : 0 名、1 : 2 名) ※全学 3.81
- ・ 秋期平均 3.69 (5 : 8 名、4 : 13 名、3 : 17 名、2 : 0 名、1 : 1 名) ※全学 3.95

Q 5. この授業内容は、興味深く、知的好奇心を刺激するものだった。

- ・ 春期平均 3.61 (5 : 8 名、4 : 16 名、3 : 13 名、2 : 1 名、1 : 3 名) ※全学 3.76
- ・ 秋期平均 3.67 (5 : 7 名、4 : 16 名、3 : 13 名、2 : 2 名、1 : 1 名) ※全学 3.91

まず、履修者数 52 名（春期回答者 41 名、秋期回答者 39 名）であるが、春期の時点で既に 9 名の長期欠席者が発生しており、この内 7 名は一度も授業に出ない全欠者か、出席 5 回以下の者であった。右の設問の傾向を検討していくと、Q 2 では平均値が微増しているが、実質的には 4 から 3 へのマイナス的な移動が増加しており、これは秋期の授業内容が割り当てによって増加し、その予習量の消化を嫌がったことに比例していると思われる。Q 3 では秋期で「1 : 0 名」になり平均値が上昇しているが、必ずしも理解が深まったことを意味しておらず、実質ほぼ横這いとなっている。Q 4 では平均値が微減しているが、これは Q 2 と表裏一体し、授業で求められる自主学習量が増加したことを反映していると考えられる。そして Q 5 でも実質的に横這いの平均値となっている。

以上のことから読み取れるのは、僅かながらではあるが、春期のいわば機械的な作業に比べ、秋期の工具書を用いて専門的かつ自主的に〈読み解く〉学習を避けたいという傾向、そのような学習量が比較的多いため、それが必ずしも安易に単位を取得出来る「満足」には繋がっていないこと、そして 2 と 1 の「(あまり)あてはまらない」に回答者の約 1 割がいるということである⁽³⁾。

ただし、「意欲をもって」「参加した」受講生は 5 と 4 の「(よく)あてはまる」を合計して 5 ～ 6 割存在することから、参加型授業の指導が過半数に受け入れられていることもまた事実であろう。問題は「(あまり)あてはまらない」者に対して、如何に最低限の付加価値を担保した上で、次の専門的なステップに導き、内的な動機づけによって作業出来るように指導出来るかという点にあると言えよう。

おわりに

新たな方針による本科目の指導はようやく緒に就いたばかりであり、上述のように、なお授業改善すべき点が多々存在する。それらを具体的に一つ一つ克服していくのが、当面の課題であるが、より深刻な問題が横たわっている。それは履修者の 2 割を占める面識さえ覚束ない長期欠席者の存在である。授業内容がどうかという以前に、出席さえ殆どしない彼らに、授業担当としてハラスメントと受け取られない範囲で何が指導出来るのが改めて問われている。ここに東洋史学専攻、そして文学部の未来が掛っていることもまた否定し難い事実である。

註

- (1) 授業では筆者作成のレジュメを配布し、「東洋史概説Ⅰ～Ⅳ」の教科書である堀敏一『中国通史』（講談社学術文庫）や「東洋史研究法Ⅰ」の教科書である漢文読解の基本的な文法を説明する近藤春雄『漢文のよみ方』（武蔵野書院）を補助的に利用するが、特に「漢和辞典」は専攻の指導方針として『角川新字源』を積極的に推奨している。それには幾つかの指導上の理由がある。まず卒論作成で使用必須の諸橋徹次『大漢和辞典』（全13冊。大修館書店）に書いてある文語文（旧仮名遣いを含む漢文書き下し調の文）を理解するためには、大学教育で定評のあるこのレベルの「漢和辞典」が日常的に検索出来る力がついていないといけないこと、次に授業での指導には親字一万字程度の漢和辞典が望ましく、またその基準を満たした辞書を統一的に揃えさせ、指導・理解を容易にさせる必要があること、そしてその際には携帯が比較的し易いサイズであり、かつ広く流通しているため、古書店でも容易に安価な値段で入手可能（旧版を利用してもさほど利用に支障は出ない）であることが想定されているからである。そして日本語とりわけ文語文を読解するには、「漢和辞典」に加え、頻繁に「国語辞典」を検索する必要がある。その際に『広辞苑』（岩波書店）は往々に表層的な説明に終始することが多い。よって用例も提示する三省堂の「国語辞典」を推奨した。
- (2) 『平成25年度 国士舘大学文学部便覧』50頁「試験と成績および単位の認定」の第4条を参照。この規定は概ねこの大学でも単位取得の必要要件になっている。
- (3) そして最終的な評定が「優」が15名、「良」が21名、「可」が2名である中、長期欠席者を除けば、この約1割に当たる4名が単位を落としている。

概説として教える歴史学

太 田 麻衣子

2013年度におこなった授業アンケートのうち、もっとも目についた要望は「中国以外の歴史もおしえてほしい」というものであった。とくに報告者が担当する科目には「東洋史概説A（東洋史概説Ⅰ）」と「外国史概説」というふたつの教育職員免許状の資格取得に関係する科目があり、社会科教員をめざす学生にたいしておこなう授業であるからには、そうした要望は受けいれるべきであると考え。ただし「東洋史概説A（東洋史概説Ⅰ）」は専攻にかかわる科目であり、ほかの科目との兼ね合いもあって、報告者の授業だけその和を乱すようなことはできない。そこで今年度は、「東洋史概説A（東洋史概説Ⅰ）」のほうでは世界史の観点からみた東アジア文化圏について中国を軸に講義することにし、「外国史概説」のほうではアジア史を講義することにした。なぜ世界史ではなくアジア史に

したのかというと、世界史全体を取り上げては、時間が足りず、十分な講義内容にはならないと判断したからである。ただし、東西交流に重点を置いた内容にし、西洋との比較をつねに行うことで、アジア史をつうじて世界史を理解できるように試みた。

そのための工夫のひとつに、宮崎市定氏の『アジア史概説』（中央公論新社、1987年）を教科書に指定したことが挙げられる。本書は数十年まえに刊行されたものだが、世界史の観点からアジア史をとらえるその歴史観はいまなお充分に通じるものであると同時に、むずかしい理論によって初学者を敬遠させることなく、歴史というものがわれわれの生きている現代社会にも息づくものであることを実感させてくれる良著である。むろん研究の進展により記述の一部には改められるべきところもあるが、講義中にそれを指摘することにより、むしろそれは歴史研究の進展や教科書が絶対的なものではないことを学生におしえる好い機会となった。

このようにして「東洋史概説A（東洋史概説Ⅰ）」と「外国史概説」とでとりあげる地域を変えてみたところ、やはり「外国史概説」のほうでとったアンケートでは、「アジアと聞くと中国と日本のイメージだったが、もっと広がったことがわかった」という意見や、西洋との対比でもってアジアをとらえる視点をみることができた。いっぽう、「東洋史概説A（東洋史概説Ⅰ）」のほうでとったアンケートでは、中国・日本を中心とした東アジア世界への感想を述べるものが多かった。「東洋史概説Ⅰ」は東洋史学専攻の必修選択科目だが、今年度より開講した「東洋史概説A」は東洋史学専攻以外の学生に向けた科目であり、とくに考古・日本史学専攻の学生が多く履修していることから、こんごは日本とのかかわりをより重視した講義内容になるよう改善していきたいと思う。

若者の歴史ばなれが指摘されるようになってひさしいが、実際にアンケートをとってみても、歴史に興味をもっている学生はすくないようで、歴史を題材とした小説やマンガ、ゲームにすら触れたことがないという学生がほとんどであった。そうした学生にいきなり歴史に興味をいだかせるかということに毎回腐心しているのだが、その試みのひとつとして、歴史学というものもまた実学たりえることを、ことあるごとに主張するようにしている。あたりまえのように存在している現代社会が、最初からしかるべくしてそこにあるものではないということ、過去にどのようなできごとがあり、それが積み重なった結果に現在があること、そうしたことを学び、理解することは、未来への指針となるのである。また、世界がさまざまな価値観や文化、歴史をもつ異なる地域が相互に関係しあって構成されているものだということを知ることで、いま現在の国際社会への理解もより深めることができる。思えば、若者の歴史離れは、歴史が学問となり、さらには教科となることで、かえって身近に感じられるものではなくなったせいではないか。この

「身近さ」をとりもどすことが、こんごの歴史教育には必要ではないかと思われる。

また、歴史が敬遠される要素のひとつには、いうまでもなく高等学校までに培われてきた「暗記科目」という認識も大きく作用している。大学においては暗記ではなく理解が大切であることは授業中になんども強調し、課題やレポートでもその点を重視したため、アンケートでも歴史にたいする認識が変わり、以前より興味をもてるようになったという回答をみることができた。また、パワーポイントを使ってつねに地図を表示し、遺跡や遺物、文化財などの写真資料も多用するなど、視覚的に学べるような配慮もしたが、これも好評だったようである。ただし、伝えなければならない情報量の多さにふりまわされ、わかりにくいレジュメをつくってしまっていた点は反省しなければならない。どのようなレジュメが最適か、ほかの先生方を参考にさせていただきながら、改善していきたいと思う。

なお、学生がいったいどのようなことに興味をもっているのか知りたいというおもいから、試みに「授業中に学びえたことについて、自分の興味のある事柄を選び、さらに深く調べてレポートにまとめよ」という課題をだしてみたところ、「参考資料はかならず注に挙げておくように」と指示していたにもかかわらず、参考資料を挙げないばかりか、挙げていても Web サイトの URL しか書いていないレポートを複数人が提出してきたことがあった。授業中になんども Web 上の情報には注意が必要であることは強調していたのだが、レポートに挙げられた URL から察するに、どうやら高等学校までの学習段階ですでに Web 上のフリー百科事典や総合学習掲示板とでもいうようなものを利用する習慣が身につけてしまっているようで、その習慣は口でいうだけではなかなか変えられなかったようである。むろん、Web も使い方によっては非常に有用な道具であることはたしかであり、問題はそれを過信しすぎてはいけないということのほうである。物心ついたときから Web 検索が身近なものとして存在していた世代と、そうでない世代との感覚の差を痛感すると同時に、こんごはまず Web 上の情報がいかに危ういものであるかを事例でもって示しておく必要性を強く感じた。

わからないことはすぐに Web で調べるということを、まるでことばを覚えることと同じようにして身につけてしまうと、知識への欲求自体がそもそも芽生えにくいのではないか。考究し、発見することの楽しさに気づかないのではないか。そう考えてみると、みずからの力で調べ、または観察し、発見するという歴史学のプロセスを体験させることこそが、歴史に興味を抱かせ、歴史への理解を深めるために、まず必要なことなのではないかと思われる。講義という授業形式においても、課題を工夫することによって、そうした実体験をさせていくことは可能であろう。こんごはそうした取り組みもおこなっていくことにしたい。